

グリム、メステール『文芸通信』と レチフ・ド・ラ・ブルトンヌ

小 澤 晃

1 『文芸通信』

この小論は、グリム男爵、ディドロ、メナール神父、メステール、その他の手になる高名な『文芸通信』 *Correspondance littéraire* において、レチフ・ド・ラ・ブルトンヌの作品がいかなる論評と待遇を受けているかを吟味しようとするレチフ研究の基礎的作業である。レチフ研究はこのレヴェルから地味な作業を積み上げていかねばならない段階にある、というのが筆者の基本認識である。幸い、この広翰な『文芸通信』全16巻は復刻されているから⁽¹⁾、必ずしも古書の山に分け入らなくとも容易に近づくことができる。

『文芸通信』におけるレチフへの直接的言及は、ある意味では重要な部分的省略が行われているはずのもの、記事の大小にかかわらずライヴズ・チャイルズによって拾い上げられているから⁽²⁾、それを参照するだけで『文芸通信』のレチフ評価を知るには充分であるように一見思われる。しかし、『文芸通信』は今日われわれが眼にするような印刷出版された著作ではなく非公開の言わば私的サークルにおける私信にすぎなかったから、必ずしも当時の一般的評価を代表しているとはかぎらないということは注意されなければならないし、また後述するごとく、その読者たちがきわめて特殊な層の少数の特権的人物たちであったことも忘れてはならない。加うるに、記事の載せられている号にはそれ自体の文脈があり、それが論調に微妙なニュアンスを与える場合があるという点である。ライヴズ・チャイルズの労作に瑕僅ありとするならば（もちろんこれが忘恩の言であることは承知の上であるが）その点に対する配慮が省略されていることであろう。さらに念頭に置いて置かねばならないことは、通信者グリムとその秘書であり、1773年以降は実質的主筆となるメステールは、旧制度下において彼等の属する階層が他の階層に対して相対的に保持している社会的・思想的立場（あるいは、そうありたいとする願望）を共有し、それが論評に独特の色調を与えていることがありはしないか、という点である。

レチフが異常なほどの多作家であったこと、またその文体の質が、ある基準に照らした時、必ずしも上等のものとは言えないという類の評価は、レチフに触れたほとんどもすべての文章に一致して現れる断定であり、その断定に根拠がないと

主張するためにはおそらく蛮勇を必要とするだろう。既に同時代人サド侯爵がレチフを痛烈にやりこめた文章を残している⁽³⁾。実際、十八世紀フランスの文学的・思想的巨人たちの残したそれぞれに緊密かつ上質の文章の傍らに置いたとき、レチフの文章ほど冗長かつ散漫な印象を与える文章も珍しい。しかし一方ではレチフの文章を擁護した者もいたことは知っておくべきことである⁽⁴⁾。1753年から1773年にわたる20年間主筆を勤め、今日彼の名をもってこの『通信』を代表させているグリム男爵のごとく、きわめて高い古典的教養と趣味を備えた文人にして、かつ「百科全書」の有力な執筆者のひとりとしてディドロと親密な関係にあった知識人の眼に、言うところの悪文家・悪趣味家レチフがいかにか映るものは常識的に想像がつくと言えないでもない。また、実質的にレチフの作品の大半を論評した人物であり、ディドロとグリムにほとんど兄事していると評しうるメステールの眼にいかにか映るかも、また容易に想像が及ぶると言えなくもない。しかし『文芸通信』はレチフについて現実は何を語っているのか。何を是とし何を非としているのか。このことを詳しく吟味してみることが無意味であるはずがない。本稿はその間の消息を『文芸通信』の本文に実地に就いて調べてみようとするものであり、従来散発的に引用されてきたものを言わば一望してみようとするものである。

『文芸通信』におけるレチフの遇され方の困ってきたところをよりよく了解するために、『文芸通信』と、その最初の20年間の主筆グリム男爵について若干のおさらいをしておく必要があるだろう。フリードリッヒ・メルヒョール（フレデリック・メルショール）・グリム（後に爵位を受けグリム男爵、1723年～1807年）は名前の示すごとくドイツ人である。十八世紀フランス文学の圏域において彼の占める位置を一言で言えば、ディドロの盟友であった当時最良の批評家のひとり、ということになる。レーゲンスブルク（ラティスボンヌ）に生まれ、資産家の出ではないが、ライプツィヒ大学において良質の教育を受けたのち、フリーゼン伯に随行してパリに滞在し、伯爵が天逝したあともパリにそのまま留まった。そして、ルソーの紹介で1749年頃パリの文学・思想界とのつながりができた。1753年、当時世上を賑わしたフランス音楽・イタリア音楽優劣論争の渦中に投じた痛烈なパンフレットによって文名を挙げ、パリ知識界の人気者になった。しかし、彼の抱懐していた哲学的傾向はディドロやドルバックに近く、またデピネ夫人の愛人となったことを直接のきっかけとしてルソーと袂を分かつこととなってしまった一件はよく知られている。（この辺りのことについては、とりわけグリムの人物については、きわめて一方的で怨念に満ちた記述ながら、ルソーの『告白録』第8巻、第9巻にまことに詳しい。）

1753年、グリムはしばらく前にレナール神父によって始められていた『文芸新

報』 *Nouvelles littéraires* を神父から受け継ぎ、これを『文芸通信』と改題したのち、1753年5月号から通信を開始した。この『文芸通信』は、十八世紀中葉においてまことに華々しい活気を呈していたフランスの文学・思想界の動向を外国の啓蒙的・知的君主たちに報告する目的で開始されたものであった。グリムはその仕事をレナール神父から受け継ぐと、主として、ザクセン・ゴータ公妃、ロシア女帝エカテリーナ、スエーデン女帝、ポーランド王など、顧客である10人ばかりのヨーロッパの君主に宛てて、1790年まで半月に一度の割合で（月に一度の場合も多い）次々と通信を書き送った。すべて手書きで、一部400フランという高額であった。この「通信」の全体は結果的に、当時のフランスの知的・文学的動向を逐一記録することになると同時に、百科全書派および啓蒙運動に近い立場にある者の思想と審美眼によって判断された、十八世紀後半におけるフランス文学の収支決算書という趣をも呈することとなった。グリムはドイツ人であったが、フランス語をみごとに駆使することにかけては外国人のうちでも第一級であり、文体は活気と才知に溢れ、その論評的的確性、正確性、妥当性については、彼の判断するところをそのままに信じてもいっさいの不安を覚える必要がないほどであるとされていた。サント・ブーブはグリムをハイネに比している⁽⁵⁾。

ここで注意せねばならないことは、上述のごとく『文芸通信』の主筆は1773年からメステールに代わっていることである⁽⁶⁾。同年5月号の通信の冒頭でグリムは、「これらの紙葉の筆者は所用でドイツへ出かけざるをえなくなったためある知友に通信を任せることになり、不在中はこの人物がその任務を果たすことになりました。この取り決めは3月から始まっており、筆者の戻るまで続くことになりました。」⁽⁷⁾と書いている。しかし実際は、グリムの手になる通信の記事はその後きわめて稀になるのであり、執筆記事を特定することもできる。グリムの文体が機知縦横の才筆という印象を与えるのに対して、メステールのそれは比較的穏当で「けれんみ」がなく、言ってみれば「良識的」である。筆者がいずれであるかは究極的には重大な問題をもたらすものには違いないが、それらの詳しい考証をすることは筆者の力量を越える。本稿ではトゥルヌー版『文芸通信』の指示するところに従うことにしたい⁽⁸⁾。

* * *

『文芸通信』におけるレチフへの論評は次の20箇所を数える（その内2箇所は間接的なものにすぎない）。仮に通し番号を付して年代順に列挙してみよう。括弧内は前記トゥルヌー版の巻数と頁数であり、末尾は言及された作品である⁽⁹⁾。

- 1 1768年1月1日号(第8巻17頁)『有徳な家族』*La Famille vertueuse*
- 2 1770年5月1日号(第9巻20頁～21頁)『演劇改革論者』*La Mimographe*, および『売春改革論者』*Le Pornographe*
- 3 1771年3月15日号(第9巻274頁)『T伯爵,あるいは若者学校』*Le Marquis de T***, ou l'Ecole de la jeunesse*
- 4 1772年9月1日号(第10巻67頁)『父への手紙』*Adèle de Comm**, ou Lettres d'une jeune fille à son père*
- 5 1773年2月号(第10巻207頁)『女三態』*La femme dans les trois états de fille, d'épouse et de mère*
- 6 1775年11月号(第11巻160頁～161頁)『墮落百姓』*Le Paysan perverti*
- 7 1775年12月号(第11巻171頁)『墮落百姓』
- 8 1776年6月号(第11巻276頁～277頁)『父親学校』*L'école des Pères*
- 9 1776年11月号(第11巻388頁)『ジノグラフ』*Les Gynographes*
- 10 1778年7月号(第12巻150頁～151頁)『新アベラール』*Le Nouvel Abeillard*
- 11 1778年10月号(第12巻174頁～175頁)『父の生涯』*La Vie de mon père*
- 12 1779年7月号(第12巻285頁)『父の呪い』*La Malédiction paternelle*
- 13 1780年4月号(第12巻392頁)『当世女』*Les Contemporaines*
- 14 1780年10月号(第12巻443頁)『当世女』
- 15 1781年4月号(第12巻498頁)『当世女』
- 16 1782年4月号(第13巻107頁)「どぶ川のルソー」云々 *le Rousseau du ruisseau*
- 17 1783年5月号(第13巻310頁)『40男の最後の恋』*La Dernière Aventure d'un homme de quarante ans*⁽¹⁰⁾
- 18 1785年6月号(第14巻177頁)『マレーの夜語り』*Les Veillées du Marais*
- 19 1785年8月号(第14巻204頁～205頁)『墮落百姓女』*La Paysanne pervertie*
- 20 1785年10月号(第14巻227頁)「レチフ氏に捧げる詩」*Vers pour le portrait de M. Rétif de la Bretonne, par M. Marandon*

こうして列挙してみると、『文芸通信』の言及がレチフの処女作『有徳な家族』に始まり、中期の代表作『墮落百姓』、『父の生涯』、『当世女』を経て、大革命の勃発する4年前までで終わっていることがわかる。(ただし前述のごとく、トゥルヌー版の各巻末の索引の指示するところによれば、6番の『墮落百姓』以降はグリムではなくメステールの筆になるものである。実際そのことは文体に現れている)

この一覧表を眺めて気づくのは、『文芸通信』のもっていた言わば「速報性」

とでも称すべきものである。20箇所の論評のうち19番の『墮落百姓女』が出版後約1年後にようやく触れられているのを例外として（16番と20番は作品そのものに関するものではないので除く）、他はすべて出版後1月後、2月後といったあまり間を置かないうちに取り上げられていることである¹¹⁾。このことは『文芸通信』がまさしく「新刊案内」の側面を有していたことを髣髴とさせるものである。またもう1点は、無視された作品もかなり多いということである。グリムがレチフの処女作『有徳な家族』を酷評したあとの約2年間（もちろんレチフがこのような「私的通信」の存在や、自作が俎上にのせられていることを知る由もなかったであろうが）、レチフは別段無為に過ごしていたのではない。その間に『リュシール』*Lucile*、『ファンシェットの足』*Le Pied de Fanchette*、『やむにやまれぬ打明話』*La Confidance nécessaire*、『私生児』*La Fille naturelle*の4作計5巻を、作家となったことに有頂天になりつつ公表している。だがそれにもかかわらず『文芸通信』は、レチフという「群小作家」の存在などまるで無視するかのようになり、ようやく2年後の1770年に至って『売春改命論者』*Le Pornographe*に触れるだけである。しかし以後は少なくとも年に一回、それもかなりの場合半ばあきれ顔で気は進まないながらといった筆致でレチフに論及してゆくことになる。取り上げるに値するものは取り上げるというこの方針はレチフに対するかぎり『文芸通信』の一貫した態度であった。

2 酷評——1768年～1773年

『有徳な家族』はレチフの処女作である。彼は三十をいくつか過ぎ、いさかいの多い妻との生活に疲れた印刷工であった。その自分が知的・社会的にはるかに高い地位を占める（と彼にはひたすら思われる）作家として自己の著作を世に出したのである。その頃の喜びと得意をレチフはあちこちで、しかもきわめて晴れがましい口吻で語っている¹²⁾。しかし、いかにレチフの与り知らぬ特権的な私的通信の中であったとはいえ、『文芸通信』はあたかもレチフの有頂天を嘲笑うかのように、以下のごとき論評を展開した。

《小説総まくり——小説作者たちとその他の虫けら》

十一月と十二月は一年のうちでも、この虫けらがもっとも元気で素早く繁殖する季節です。他の虫が冬に入ると死ぬのとは反対なのです。隣れみなど捨ててここで火をかけておきませんと、冬中これに悩まされる危険があります。》¹²⁾

このような前置きに続けて、合計13篇の小説がことごとく酷評の憂き目にあっている。その中で後世に名を残したのは、一時ディドロの愛人だったピュイジュー夫人を除けば、レチフだけだと言っても差し支えないだろう。三番目に取り上げられたレチフの処女作、レチフがあれほどの意気込みで書き上げた処女作は、憐れ、こう一刀両断にされている。

『有徳な家族』——英語より訳出したる書簡（次いでに言うておきますと、これは真実ではありません）。ラ・ブルトヌヌ氏著。新しい文字遣いに得意満面。四巻。死ぬほど退屈。〉⁽³⁾

にべも無い、とはこういうことを指すのではあるまいか。掛け値無しの酷評である。もっとも、他の小説に対してもさらに長くさらに厳しい評を下しているのだから、この程度はかえってあっさりしていると言いうるかもしれない。しかしこの素っ気なさが逆に侮蔑の深さを窺わせるとも言いうるだろう。13篇を次々と切り捨てたのち、こう締めくくりに評言を述べて「絵まくり」は終わる。

《以上すべての紙屑の山には、次なる実りにわずかでも希望を抱かせるものひとつなく、わずかな才能を告げるもの、ごくちっぽけな成功を予告するものひとつないと思うと、矜持に胸膨らむという思いはあまり致しません。》⁽⁴⁾

グリムが「小説」というジャンル全体を軽蔑しているのではないことは、わずかでも期待の思いがあることを窺わせる上の言葉から推測することができる。このジャンルがいかにもぬえ的で節操に乏しいにしろ、またそのもっとも充実した開花期を見るためには次の十九世紀を待たねばならなかったにしろ、この1768年という年までに、フランスの文学界がすでに秀れた小説を持っていなかったわけではない。十七世紀はひとまず置くとしても、すでに『マノン・レスコー』（1731）、『マリヤヌの生涯』（1731～41）、『新エロイズ』（1761）、『クラリッサ・ハローウ』の仏訳（1752）があった。しかし、やはり小説はようやく自己主張をし始めたばかりの未成のジャンルであった。すべてを呑み込む貪欲さこそがその生命であるとはいえ、文学の正統の仲間に加わるには一段低い存在であり、実際、哲学小説、教化小説、滑稽小説、感傷小説等々、当時のさまざまな傾向の小説は文字どおり玉石混淆の状態を呈していた⁽⁵⁾。そのことはこの時期に、ディドロやサド侯爵やレチフ自身を含めた様々な作家によって、ジャンルとしての自己証明のための小説論が書かれていることから知ることもできる⁽⁶⁾。

この『有徳な家族』は、12折版4巻、1200頁近くの⁽⁷⁾、決して短いとは言えな

い当時流行の書簡体小説である。しかし、このはちきれんばかりの功名心と自負心によって書かれた処女作はあまりにも駄作にすぎた。タバランの言を借りれば、「レチフの作品中でもっとも内容空疎で生彩に乏しく、1150頁にわたって延々と、動きも色彩もないうんざりするほど平板な話が展開する」⁽⁸⁾のである。しかしレチフにとってはきわめて重大な意義をもつ処女作であった。しかるに、いかに私的通信とはいえ、当時唯一論評に取り上げてくれた『文芸通信』で「死ぬほど退屈」と酷評されたのである。

グリムの評言中にある「新しい文字遣いに得意満面」という一句は意味深い。正統的な教養の持ち主グリムにとってこれは許しがたい愚挙であったに相違ない。実現はしなかったが、レチフが「フランス語改革」をめざして『言語改革論者』*Le Glossographe ou la Langue réformée*なる著作を計画していたことは知られている。その内容、主として「正書法」については、具体的な案ともどもレチフ自身が『我が作品』に書き残している⁽⁹⁾。これは「簡単で不変、しかも発音に合致した綴字法をフランス人に与えよう」⁽¹⁰⁾という意気込みでレチフが考案したものである。

言うまでもないことであるが、レチフの熱意と抱負にもかかわらず、綴字と発音を一对一の対応関係に整理しようとするこの案に類した改革案は現代に至るも実現していない。(因にこの国語改革論者レチフについては、F.ブリュノが『フランス語史』の第6巻で触れている⁽¹¹⁾)。アクサン記号や鼻音記号の多用、複母音字の短母音字化、等々、レチフ自身も認めているように「初めて見ると、この綴字法は読みにくくもあり滑稽でもあるように見える」⁽¹²⁾。まさにそのとおりであろう。「しかしそれは考えと慣れが足りないのである」⁽¹⁴⁾と言うレチフ特有の自信過剰の言に至っては、グリムならずとも容易には納得しにくいに違いない。

このレチフの表音主義的配慮は、彼の確信にもかかわらず、ひどく便宜主義的な思いつきの域を出るものではなかったのは確かである。単純化を恐れずに言えば、ここにすでに『文芸通信』が体質としてもっていることを思わせる「体制擁護的」な「権威主義」と、レチフの無邪気かつ無意識のゲリラ戦法とがはしなくも露呈しているのを見るようで興味深い。『有徳な家族』が書かれているのは、まだこれほどレチフ流に体系的な案にまで至ってはいないものの、同様の表音主義的精神に根ざした「新しい綴字法」によるフランス語なのである。グリムが衝いているのは、まさにこのひとりよがりの文字改革と「死ぬほど退屈な」その内容に他ならない。しかもグリムはきわめて深い古典的教養を備えた文人であり⁽¹³⁾、『文芸通信』の相手はすべてフランスの文学的、知的状況に関心を抱く外国の社会的選良たちである。ひとりの作家の処女作が、書かれている言葉と内容の両面にわたってこれほど決定的な「欠陥」を抱えていると判定されたのでは、以後二

年間『文芸通信』が「ラ・ブルトヌヌ氏」なる三文作家を完全に無視することになったのは当然のことと言わねばなるまい。

1770年5月、『文芸通信』は二年ぶりにレチフを取り上げる。医師クレール氏なる人物の支那に仮託したとおぼしき政治論をやりこめた後に続けて、レチフの『演劇改革論者』*Le Mimographe*と『売春改革論者』*Le Pornographe*が槍玉に挙げられる。

《もうひとりの政論家も厄介払いして、ヴィレール・コトレなるクレール氏のもとへ話相手に送ってやろうと思いますが、さほどの手間はかかりますまい。このモラリストの名前は知りませんが、8折版で500頁に垂とする大冊を近頃出版致しました。『奇妙な思想、第二巻、「演劇改革論者」、あるいは我国の演劇改良をめざす1貴婦人の思想』。『売春改革論者』の著者による。『売春改革論者』の著者は昨年、彼の『奇妙な思想』の第一巻として一書をものし、処女を集めたいいくつかの尼寺の設立に警察の関心を惹こうとする計画案を出しています。その案によりますと、集めた娘たちの健康を当局の絶えざる配慮の対象とし、他方その娘たちの天職を、大衆に快楽を提供するため、安価かつ一定の利用税と引き換えに身を捧げるものとしよう、というのです。いや大したものです。その言やよし。それでこそ市民というものです。しかし、いかに自分が生活の中で良い考えを思いついたにしても、野卑な文体の他は何の妙味もなければ非凡なところもない空想を半年ごとに撒き散らして、同国人をうんざりさせる権利はないのです。その野卑がまた気取っているときているのですから最悪です。いかに「ドラマチスム」だとか「コメディスム」だとかの言葉の載っているらしい辞書をまるごと1冊でっちあげたところで、また、その他夥しい造語をわざわざ用いて自分の思想に奇妙な様相を付与しようとしたところで、ただただ陳腐になるばかりでありましょう。女優に触れた一節でこの著者は、彼女たちの風儀と魅力がまことに思慮深い芝居の上演を「不都合する」などと言うのです。彼の本こそ趣味の進歩を「不都合することでしょう」。読めたとしたらのことですが。》⁽⁴⁾

『奇妙な思想』は当初6作を予定していた。第6番目が上に触れた未完の『国語改革論者』であり、『売春改革論者』と『演劇改革論者』はその第1作と第2作に当たる⁽⁵⁾。両作とも初版の扉では実際の著者名は秘匿されたままであるから、グリムが名前は知らないがと言っているのも当然のことであり、ましてやこれをあの「ラ・ブルトヌヌ氏」のものと考えて取り上げたものでもない。

興味深いことは、この号の通信がアミヨ神父が中国語から訳した書のディドロ

による書評で始まっているという点である。その記事を受けて後を続けるグリムの筆は明白にディドロに対する敬愛の感情に染まっている。ドルバックの名が出る。ダランベールの名が出る。ジョフラン夫人の名が出る。通信の相手はフランスの知的動向に関心を抱く外国の君主たちである。そこには「哲学者」たちの親密な交友関係と、百科全書派の体現する「進歩的で近代的な」知的、美的、思想的傾向がそこはかたなく漂っている。言わば「進歩的知識人たち」の仲間うちで無学で粗野な愚か者が嘲笑されているという観がなくもない。

それにしてもグリムの批評がまたしても、著作の内容とともに言葉と文体を嘲笑っているのは興味深いと言わねばならない。今度はレチフ得意のネオロジスムである。一般的に言って、ネオロジスムは、良くも悪しくも、言語の硬直した規範性からの意図的逸脱であり、またそれがこの時代のひとつの風潮であったことは事実である。しかし、それにしてもレチフのそれがあまりに拙く無教養の印象を与えることは否めまい。

論評中で今ひとつ注目すべき点は後半の嘲笑の意味することである。この嘲笑は平たく言いかえると、下らないことを書き散らして出版し、世間を騒がせるなということに他ならない。しかし、表現への欲求はその手段を所有することで初めて実体化しうるものであることは明らかであるから、この非難を投げつけるグリムとそれを面白そうに読んでいる（はずの）選良たちの側には意識的、無意識的に、驕りに満ちた表現手段の独占志向がまずあり、その独占を支える基準が「良き趣味」だと言っているに他ならないことは見易いことである。ところで今日の理解において、レチフにとって「書くこと」はそのまま「生きて存在すること」であり、良き趣味という基準によって暗黙のうちにその意志を禁じようとしたことは、ひとつの存在を気楽に扼殺しようとしたことと同義の、「未必の故意」に似た暴力である。（このことは、言わばアンシャン・レージュにおける「表現手段篡奪者レチフ」というテーマ設定につながりうる興味深い論点かもしれない。）

いずれにしろ、グリムの論評はほとんどうんざりするといった口吻でレチフの言葉遣いをからかっている。そして、内容については論ずるもばかばかしいという気配である。しかし、『売春改革論者』についてはきわめて好意的な同時代の感想があり¹⁸⁾、パリ以外の地方では熱心な賛同もあったという点は¹⁹⁾、ひとつの社会が激しくうねっている時代の様相として考慮に値するであろう。ましてや、レチフの全存在を規定しているかに思われる奇怪な夢想性の射程を見抜くには、両者の精神の質に径庭がありすぎたと言うべきかもしれない。

こうして以下に続く3作品もことごとく酷評の憂き目にあっているというのはまことに憐れと言うべきである²⁰⁾。しかるに、『墮落百姓』が現れるに及んで、

『文芸通信』の論評は（筆者はメステール）それまでの一刀両断の剣さばきを鈍らせることになる。ここで初めて『文芸通信』はレチフ・ド・ラ・ブルトンヌという作家と彼がそれまでに書いた「駄作」の山とを結びつけ、当惑しつつ注目することになる。

3 注目——1775年

ライヴズ・チャイルズの指摘するとおり、今日知られている「レチフ・ド・ラ・ブルトンヌ」という筆名を自分の作品に付したのは『墮落百姓』が初めてだというレチフの言い分は思い違いである。ただし、処女作に付した著者名は単に「ラ・ブルトンヌ氏」であり、次いで『私生児』、そして『売春改革論者』の第二版だけにすぎないから⁽¹⁾、『文芸通信』の筆者にとって、この名前はほとんど未知に等しかったと推定することはできる。ところで先にも触れたごとく、1773年3月以降『文芸通信』の事実上の主筆はグリムからメステールに代わっており、文体もグリムの軽快な揶揄に満ちた筆致から穏当で実直な、言ってみればあまり面白みのないありふれたものになっている。しかし実際の執筆者のいかんにかかわらず、『文芸通信』の公式の代表者グリムは内容に責任をもつ立場にあり、そのことは必然的に記事における評価の是認を意味する。従って、『墮落百姓』に至って初めて『文芸通信』の判定に肯定的な面が現れてくるのは、それがメステールによるものであるからということとは別のことを意味するであろう。言わば『文芸通信』という人格的主体を想定することが可能なのである。いずれにしろ、『墮落百姓』を紹介する『文芸通信』の口ぶりは、前節を辿ってきたわれわれにとってなかなか興味深いものである。ひとしきり演劇の月旦にふけり、学術書風の著作を好意的に論評紹介したあとで、いま世間でこれほど評判になっている「ベストセラー」を取り上げないわけにはいかないと断りを付けながら『墮落百姓』に言及する。その筆致には、作者についての心当たりがあるにもかかわらず、当惑と怪訝を隠すことができないという雰囲気漂う。

《『墮落百姓、あるいは都会の危険』。登場人物たちの本物の手紙によって明みに出された近時の物語。N. レチフ・ド・ラ・ブルトンヌ氏著。12折版全4巻。この新作小説が巻き起こしているセンセーションの一件について判断を下すには、何人かの人をこれをディドロ氏の作であるとしたり、多くの人をポーマルシェ氏の作だとしてしまうと申し上げるだけで充分でしょう。ディドロ氏の作品でないことだけは確かです。しかし、これが表題にある著者の作、つ

まりある有名な印刷所の職工頭の作、要するに、『売春改革論者』、『演劇改革論者』、その他もろもろのものしたら・ブルトンヌ氏であると聞かされた後でも、実際にこれを読んでみると、毎頁ポーマルシェ氏がその筆と天才を貸し与えたのではないかと疑われないわけにはいきません。》(2)

到底信じられないという様子である。あろうことか初版の巻末には、一種の出版広告として、レチフがこれまでに世に問うた全作品が内容紹介の短文を付した一覧表になって掲載されているのである(3)。そこには『文芸通信』が無視した他の作品とともに、冷笑と慨嘆をまじえて酷評してきたすべての作品が、言わば「同著者による」として列挙されているのである。しかし、『文芸通信』は公平を欠くようなことはしなかった。訝しさと半心半疑の思いを残しながらも、作品を作品として読み、紹介しなければならないという最低限の誠実さは保持する。

《ともあれ、『墮落百姓』はきわめて独創的な作品です。この本には、ありそうもないことや趣味の悪さが至るところに登場し、下品さが頻りに顔を出します。そして人生の中でもっとも下劣で不愉快な場面に精神を引きずり回すのです。それにもかかわらずこの作品は人を引きつけ、引き込んでしまいます。憤慨のあまり、数頁読んだだけで放り投げてしまうことがあるかも知れません。しかし、もし好奇心がこの最初の衝動に打ち勝った場合には読み続けることとなります。そして興味が湧いてきます。あとはもういくらまた時折気色ばんだところで、縁切りにする方法はないのです。読み終えねばなりません。》(4)

『墮落百姓』はレチフの作品中、他の全作品から切り離した一個の独立した作品として見た場合でも、十八世紀、十九世紀の秀れた小説を知っている読者の批評眼に充分耐えうる数少ない作品のひとつである。公平たろうとする批評家はその価値を見落としはしない。作品の把握の仕方は正確である。ただしいくぶんかの予断によって行論が曇らされている気配がなくもない。『文芸通信』の論評をさらに追ってみよう。

《この小説からかき立てられる興味は、色々な出来事が鎖のようにつながっているそのあり方に由来するものではありません。筋の展開は単純かつムラであり、仕掛けもあまり巧妙に按配されてはいません。ですから作品の与える幻惑はすべて、その呈する多彩な光景、性格描写の力強さと真実さ、細部の素直さ、文体の熱気の中にあるわけです。》(5)

『墮落百姓』に対する論評は一頁半強で、これは『墮落百姓女』と並んで『文芸通信』がレチフに触れた文章の中でもっとも長いものである。そして論評の半分は内容の紹介に充てられているのだが、その紹介の仕方には手際の良さを感じ取れる。

《主題はきわめて堂々たるものです。これは無垢な田園の習俗の中で育った若者の物語です。若者は、都会の歓楽によって弱く感じやすい魂の内に掻き立てられたあらゆる性癖に誘われ、ある放蕩無頼の輩の手本と助言に導かれるままに、悪徳と腐敗のあらゆる段階を遍歴し、遂にはその結果であるあらゆる不幸をなめることになります。この描写ときわめて巧妙に対比をなしているのは、墮落の淵で育った乙女の描写です。墮落の淵と言っても、この乙女は他の在り方を一度も知ることがなかったがゆえにその境涯に溺れたにすぎず、まもなく予想外の状況によって清廉な感情を呼び覚まされ、それによって突然、それまでは思ってもみなかった徳行と品位の観念を抱くことができるような社会に投げ入れられます。

主人公を墮落させるゴーデ氏の手紙には多くの駄弁が含まれていますが、しかしそこには、きわめて強い力とエネルギーと明敏さを示す多くの表現を見て取ることができます。このおぞましい男の性格は力強く把握され、しかもしっかりと描写されています。有徳な女性、パラゴン夫人の性格はたぶん作品中でも一番弱いものと言えましょう。この女性はこの上なく痛ましい美德の例であり、想像しうるかぎりでもっとも悲しい報いを受けます。》⁽⁶⁾

レチフの作品は常に冗長と評されてきたが、『墮落百姓』も例外ではない。しかしそれにも拘らず、作品の魅力、人物の存在感、それから受ける強い印象を掴みとる論者の眼は公平なものである。しかし、作品の与える印象が力強ければ力強いほど、そこに描かれている悪の言わば社会的影響も強くなるだろうことに筆者の懸念は及ぶ。

《作者の目的がいかにも道徳的なものであれ、小説自体の効果はいささかも道徳的ではないのではなからうかという恐れがあります。若者にとって読んでこれほど危険だと思われる作品はあまり知りません。そこでは悪徳がきわめて魅惑的な役割を演じており、それと闘うのはただいくつかの意見と小説的な事件だけであり、作者が作中に注ごうとしたわずかばかりの哲学は、感覚と想像を燃え立たせるのに詠え向きの数々の光景によって窒息させられています。作者の筆がもっと穏当であり、作品の組み立てがもっと整ったものであり、そして

とりわけ登場人物の選択がもっと下賤なものではなかったことを惜しみながらも、率直に言って、フランスの作品で、これほどの才知と工夫と天才を見せつける作品を読んだのは久方ぶりのことであります。一体全体天才はいずくに宿らんとするのでありましょう (*Où le génie va-t-il donc se nicher ?*)。⁽⁷⁾

末尾に置かれた詠嘆の一句、ヴォルテールがモリエールの言として伝える一句のもじりが論評を象徴的に語っている。こんな者にも天才がひそんでいようとはという驚きの気持ちを隠すことができないでいるのは明らかであろう。これまで折りにふれて、しかも軽蔑と嘲笑の対象としてしか取り上げたことのない三流文士が、一体どこにそんなものを隠し持っていたのか、圧倒的な迫力でその「実力」を発揮したことに思わず動揺させられ、しかも紛れもなく文学の力によって強烈な印象を与えられたことを白状しているのである。翌十二月号では更に評価を確認してこう書いているほどである。

《毎日生まれそして死んでいくあまたの小説の中で、『美しき女の打ち明け話』と『墮落百姓』が恐らく出色のものでありましょう。この二作は欠点もありはしますが美点も欠いてはおりません。ただ、いま少し想像力を抑えてあれば良いのですが。後者が上流社会、しかも女性たちのあいだで得た異常な成功を見ますと、我々の習俗のもつ品位、厳格さを奇妙なものとお考えになるかも知れません。》⁽⁸⁾

因に、一緒に挙げられている『美しき女の打ち明け話』は恐らく同年(1775)一月号で二頁にも瓦って取り上げられている、Mlle d'Albert 著、『美しき女の告白』*Les Confessions d'une jolie femme* のことであろう。『文芸通信』の筆者はその精妙ではないが荒々しい迫力に満ちた波乱万丈の小説から受けた感銘を率直に語った後で最後に、「この小説は『美しき女の一生』と題したならばよかったらうにと思います。著者の付けた題では内容に即しておりませんし、また実際はそうではないのに、軽薄で安っぽい内容を想像させてしまいます。このテーマがフィールディングやリチャードソン流に扱われていたならば、崇高なものとなっていたでありましょう」⁽⁹⁾と述べている。その年の小説中で出色のものとする二作をともに、その構成の粗さ、文体の行き過ぎ等の欠点を持ったものとしながらも、文学的な迫力、衝撃的な印象という点で評価しているのは興味深い。そして、その言わば手本とすべき先達としてリチャードソン等のイギリス小説を挙げているのは当時としては当然のこととは言えるだろう。いずれにしる以上の論評に見られるように、『文芸通信』の判断基準はきわめて穩健主義的、社会秩序

志向的なものであることには留意しておくべきであろう。

こうして『文芸通信』はグリム以来、三文文士、と軽侮の念を以って遇していたレチフ・ド・ラ・ブルトンヌなる作家を『墮落百姓』の著者として初めて注目することになる。以後10年間、レチフの著作が登場すると概ね『文芸通信』の毀誉褒貶とり混ぜた論評が及ぶのを眼にすると、この小説の与えた印象がそれほどに当時の読書界において強烈であったことを窺うことができると言えるだろう。

4 辟易——1776年から1779年

こうして、奇怪な夢想を臆面もなく披瀝して「世直し」を公言し、退屈きわまらない駄作を発表したかと思うと、突如、公序良俗を紊乱しかねない傑作をものしてしまう、このあるべき規範、美学の一切から逸脱したかのごとき作家を、言わば不承々々ながら『文芸通信』は認知せざるをえなくなった。

『墮落百姓』の約半年後、1776年6月の号はレチフの次作『父親学校』を論評する。この号はなかなか興味深い通信である。通信の冒頭では約七頁にわたって、ラ・アルプのアカデミー入会の報告が延々と続く。そこでは「文人」なる概念をめぐる高雅な演説のやりとりが詳細に報告される。次いでコメディエール・フランセーズの女優ロクール嬢の逃亡が論じられ、セバスチアン・メルシエのヴィーラントの稚拙な模倣作に軽い苦言が呈せられる。そしてレチフの番となるのだが、因にレチフを論じたすぐ後に、デピネ夫人のガリヤニ神父あての通信が載っているといたった具合である。このような文脈の中にいるレチフというのはなにかしら、「ボン・サンス」と「ボン・グー」を行動原理とする上品なサロンに突然出現した闖入者を髣髴とさせずにはおかない。

《『父親学校』、N. E. レチフ・ド・ラ・ブルトンヌ氏著。エピグラフとして、「汝の息子を、汝の妻がそうであつたらばと望むがごとく形成せよ。汝の娘を、汝の妻がそうであつたらばと望むがごとく育め」。フランスでは8折版で部厚い3巻。この小説は『墮落百姓』には及びもつきませんし、あのような成功を得ることもないでしょう。しかし、これは多くの点でこの著者の他の大半の作品よりましなものです。レチフ氏はジャン・ジャックの鍛冶場のきわめて逞しいキュクロプスの一人と見ることができます。確かに彼にはジュネーブの哲人の雄弁も趣味ありませんが、時としてその力と独創性を持つことがあります。とりわけ、その主義主張と哲学とに与したものと思われまふ。氏のこの疲れを知らぬ筆になる新作は、農夫やサン・ドゥニ街の商人たち向けの一種の『エ

ミール』の戯画化なのです。しかしながら、雑駁な半可通の見解と卑俗かつ陳腐な場面のさ中に、力強い考えと目新しい描写、とりわけ真実溢れる細部を見出されることでしょう。》(1)

レチフをルソーに比すことは当時からすでに行われていたことであり、レチフ自身もそのことを強く意識していたことは周知の事柄である。当の『父親学校』の「序文」にもルソーを範とすべき作家として挙げてあるのだから(2)、メステールの感想は当たり前と言えば当たり前のことにすぎない。(稿を改めねばならないが、モーリス・ブランショの言にもかかわらず(3)、レチフとルソーの「まともな」比較研究はそれ自体興味深いものになるにちがいない。中には「レチフをルソーより高く買う」などという思わせぶりなヴァレリーの評言もあるほどである(4)。) いずれにしろ「溝川のルソー」なる蔑称を流行らせた火元はすでにここにあるらしい(5)。ともあれ先を読んでみよう。

《この小説の筋の運びは突飛かつ非常識です。しかし、今にも本を投げ出そうとするその瞬間、巧みな頁や稀に見る自然さと純真さ溢れる会話に出会うのです。これほど奇妙な構造をした頭、凡庸と天才、無知と学識、叡知と滑稽さの混合物は一体どうなっているのか皆目分かりません。》(6)

このまことに正直な感想は『墮落百姓』以来飽きもせず繰り返される決まり文句ではあるが、レチフの作品の性質とそこから受ける印象をいみじくも言い当てている。とりわけこの時期のレチフは作品の形式上の整合性などには一顧だにもしていない。溢れ出る思い、(啓蒙の十八世紀に通有とはいえ)世に有益たりたいと願う病的な教化癖、それでいて真っ向からその願望を自ら裏切らんばかりの奇怪な妄想と着想、そして何よりも内面に疼く故郷と「失われた時」への抑えがたいノスタルジー、そうした迸るようなエネルギーに駆られ、それに対応しうる表現形式を求めて利用可能なあらゆる文学的形式を気ままに混ぜ合わせているのである。そしてそのことにいささかも美的な欠陥を感じない奔放な想像力は、メステールの規範的美学の理解の及ぶところではなかったに違いない。

《『父親学校』の表明しているのは実のところ、ひたすら無垢と美德ではありますが、この種の事はレチフ・ド・ラ・ブルトンヌ氏の得意とするところではありません。彼の風変わりな想像力にとってそれはあまりにも平坦で狭い野原であります。氏は窮地を脱しようとして、ルソーの行った誇張をさらに誇張し、その道徳上の奇説が呈する妄想的で奇怪な一切を敷衍するほかはなかった

ようです。氏はツィンツェンドルフ伯爵（綴り字がでたらめですが）のモラヴィア教団を大いに讃めそやしており、ほぼ同様の主義に基づいた共同体を設立したがつているのです。この本の最後は、全体に劣らずもの珍しい田舎の小百科で締めくくられています。》(7)

ここで留意せねばならぬことは、『文芸通信』がルソーとレチフを同一の精神・思考の型に属するものとみなした上で、そのような型の思考と想像力をおしなべて「妄想的」という判断でくくっていることであり、同時にそれと自らとのあいだに、脅えにも似た様子で、明確な一線を画そうとしてるかに見える点である。この、あきれ果ると同時に感服し、引かれると同時に反発するといったアンビヴァレントな当惑の調子が、これ以後常に『文芸通信』のレチフに対する論評を特徴づけていく。『父親学校』に続く『女性改革論者』、『新アペラール』の二著についてもそれは当てはまる(8)。メステールのレチフ理解は常に『墮落百姓』から受けた衝撃に発しているのであり、『墮落百姓』をレチフ文学の本領と見なすというこの立場は、同時代のレチフ理解としてはそれほど外れではなかったし、当然の判断だったと言いうるだろう。視点を変えて一步踏み込めば、それは『墮落百姓』を発禁に処した側の世界観を共有するものとも言いうるのである(9)。

この時期の『文芸通信』の論評のうち1778年の『父の生涯』に関するものは、十九世紀におけるある種の評価の高さを知っているわれわれにとっては意外なものである。レチフの扨題な作品中でも、もっとも多くの版を重ねた作品は紛れもなくこの『父の生涯』であり、それがもっとも素直に読める作品であるのも確かなのである。『文芸通信』があきれ果てているレチフ特有の奇怪な夢想の世界からこれほど遠い作品もない。現代の観点に立ってレチフの作品世界を眺める者の眼にこれほどレチフらしくないまとまりの良い作品もないが、逆に独立した作品としてそれだけを読めば、その安手な父権賛美はまことに鼻白む底のものと映る（だがこのことは、十九世紀がなぜこれを評価したのかと問うことによって逆に十九世紀自体を知ることにつながり、ひいてはレチフの作品世界における「父」のテーマの心理的、社会的、政治的意味の広がりを探ることに通じる大きな問題であるかもしれない）(10)。ところで、この作品に対する『文芸通信』の論評は次のようなものである。

『父の生涯』、『墮落百姓』の著者によるものです。(中略)。出来の悪い版画で飾られています。

これは『父親学校』に散りばめられていた話と箴言をくどくどと繰り返したものです。誠実なる農民エドム・レチフ氏は布地商人の娘ローズ嬢を愛してい

たが、父に服従して、最初の結婚で善良なる農夫の娘マリー・ドンデーヌと結婚し、ビビ・フェルレと再婚し、云々。著者が自身をどのように描いているかを以下にお眼にかけましょう。

「私は二度目の結婚の長子である。面立ちは父と兄に似ているが、二人ほどは心地良くない。性格については、父に比べると善良さではるかに劣り、また父をあれほどに尊敬すべき人物としていた徳の力の点でもはるかに劣る。同じく兄に対しては、才知の点で劣る。私は自分が引いている血にも、実際に眼にした手本にも悖る無様な出来損ないであり、呻き苦しむばかりである。ああ、亡き父の霊よ、赦したまえ。父の代理として私を育ててくれた兄よ、赦したまえ。私は今から努力を倍にして、あなた方と同じ名を名乗る名誉に値いしようと思うのです」しかしながら別の箇所では、レチフ一族の性格は一般的に余りに「好色」であると見ています。⁽¹¹⁾

ずいぶんと投げやりで杜撰な論評である。ここには作品に対する直接の評価は何も行われてはいないうえ、目立つのはただ後半の唐突な引用と唐突な指摘である。これが揶揄であるのは明白であろう。『父の生涯』に臆面もなく溢れている敬虔さへの志向が『墮落百姓』の作者にはふさわしくない、と言っているだけなのである。ところで、レチフの作品を総体として見ようとする今日の立場からすれば、レチフは表面に現れた直接のメッセージ性から離れたはるかに深いところで、「書くこと」と「生きること」が同義であるような存在の形、要するにエクリチュール自体の内部にいる人間を体現しているように見える。しかし、同時代の時評家にそのような理解を期待するのは、無いものねだりに等しい。そもそも今日に至ってもなお、作品が直接伝達しようとしているかに見えるメッセージの検討に足をすくわれてしまうあまり、えてしてレチフに二流、三流の評価を、いわゆる「溝川のルソー」の評価を下したり、逆に誇大に先駆者視することが行われているのであるから、『文芸通信』の筆者の軽口は大目に見なければならぬ。

翌1779年7月、『父の呪い』を論評する筆致に見られるのもやはり『墮落百姓』の作家、レチフ・ド・ラ・ブルトンヌ氏の観点に他ならない。

《『父の呪い』(中略)。これは又してもレチフ・ド・ラ・ブルトンヌ氏の溜れることを知らぬ筆になる新作であり、父親の呪いによって放蕩のあらゆる自墮落と不幸に陥っていく男の物語であります。この小説は『墮落百姓』の系列に属するものですが、それよりはずっと嫌悪を催させる風俗を描き、人物はずっと妙味に乏しく力強さありません。しかしながら、この新作についても他の作品について既に言ったことを言わねばなりません。いかに主題の趣味も

描かれた場面の色合いの趣味も不愉快に思われようと、ここには常に何かしらの真実、魂の力と独創性に溢れた表現が認められるのです。氏の主人公たちは常にサン・ドニ街のジュリーでありサンプルーであります。》⁽¹²⁾

後半「しかしながら」以降が、相も変わらぬ言葉遣いによって、まさにこの時期の『文芸通信』のレチフ評価を自からまとめている趣がある。

5 亀裂——1780年から1785年——むすび

時評家の論評をこれ以上逐一追うことは、特別に注目値する発言がないかぎり、あまり実りあることではないだろう。この1780年から1785年の六年間、『文芸通信』はほとんど律気と言いつける付き合いの良さで、続々出版される『当世女』の15巻を（これがさらに延々と続くとは思ひもしなかったに違いない）、そして『南半球の発見』を、『墮落百姓女』を批評する。しかしそれにもかかわらず、その論調になにかしら新たな注目を引くようなものを見出すのはきわめて難しい。相も変わらず、良いところもあるが品がないという留保付き称賛の単調なメロディーを、内輪のサロンで奏で続けているだけだと決めつけるのは、『文芸通信』に対して同情に乏しい物言いであろうか。たしかに作品のテーマというメッセージ性だけを問題にするならば、この時期にレチフが新作として世に出した本のほとんどすべてが、（いかにレチフの側に理由があるにせよ）、それ以前の著作におけるテーマの飽きもせぬ繰り返しでしかなかったのは事実である。しかしレチフのあの驚くべき夢想の宝庫『南半球の発見』はきわめて新奇あるいは珍奇だったはずのものであるが、これについては『文芸通信』はレチフの奇怪な「妄想」を白けた筆致で紹介した後、こう書くだけにすぎない。それはほとんど気の知れた仲間内で目くばせし合う光景を思わせるものである。

《まったく馬鹿馬鹿しい限りですが、それがあまりにも厳かで生真面目なものですから、かえって味気なくうんざりしたのになってしまいます。著者自身もそう思ったに違いありません。なにしろ道の途中で突然止めてしまったのですから。小説は完結していませんし、続きを読ませる約束もしてくれないのです。何たる損失！》⁽¹⁾

今日の眼で『南半球の発見』のユートピア文学としての価値を称揚したり、シャルル・フリエ、とりわけその「ファランステール」との親近性を指摘したり

することはもちろん可能であるし、興味あることに違いない。だが同じことを同時代の時評家に要求することは無意味なことであるし、またレチフが自分の書いたことの正当性に自負を抱いていたことも差し当たって問題ではない⁽²⁾。

しかしここで注目しなければならないのは、レチフがこれを一種の自己治療として書いたのだという点である。「この作品を書き始めたのは、私の気力・体力が萎えている時だった。まだ『当世女』に手をつける前のことで、『父の呪い』の印刷中だった。朝、私は寝床の中で楽しみながらヴィクトランの小説を書いたのである」⁽³⁾とレチフは言っている。この何気なく見える回想の言葉は、レチフにおける「書くこと」の意味に通底する何かを含んでいる。『文芸通信』に限らず同時代の時評家がこの作品の伝達内容に、すでに当時陳腐化していた科学思想、政治思想、道徳思想、社会思想を読み取ったことはおそらく当然のことであろう⁽⁴⁾。その無理解を嗤うことは逆に嗤うべき錯覚である。注目すべきは、そうした論評を支える足場であり、その手口であり、要するに、論評する側とされる側との間に生じる亀裂である。すなわちここには一方に『文芸通信』という、言わば既にそこに作られてある閉じた言語だけを語り、外側の安全地帯に自らが立っていることに何らの疑いも抱かず、しかも自らはいささかも存在の基盤を脅かされることなく、高みから世界を切り刻むことが可能であると信じている、今日も世界に充満している類の楽天的な「記号の消費者」があり、他方にレチフという、自らの語る言語自体の内部で日々それを産出すると同時に産出されて生きている精神がある、ということではなからうか。(このことはここでさらに展開するには問題が大き過ぎる。別稿に委ねるべきだろう)

本稿は『文芸通信』が語るレチフ・ド・ラ・ブルトンヌをいくぶん詳細に迎ってきた。そして、そのふたつの「言葉」のあいだに露呈した深い亀裂を垣間見ることができた。最後に、例のごとく半肯定、半否定の筆致で『墮落百姓女』を論評した記事の末尾に、まるで軽蔑の駄目押しのように置かれた揶揄の一節を引用して締めくくりとしよう。

《この四巻本の最後には数多くの氏の作品の説明付きカタログが載っています。氏は自惚れの強い人のようで、自分が最初の印刷所の職工長の地位を捨てたとき懐には六、七百フランしかなく、おまけに妻と四人の子供を抱えていたこと、それが今では氏の徹夜仕事のおかげで、印刷工はおろか、仮綴工、製本工、挿絵工、版画師、銅版彫刻師等々、一家の主十二、三人の生活を支えているなどと読者に教えてくれるのです。それこそまさに立派な尊敬すべき有用な市民の在り方だと、氏とともに認めるべきではないでしょうか。》⁽⁵⁾

(注)

1

- (1) *Correspondance littéraire, philosophique et critique par Grimm, Diderot, Raynal, Meister, etc.* Notices, notes, table générale par Maurice Tourneux. Paris Garnier Frères, Libraires-éditeurs, 1877. Kraus Reprint, Nendeln / Liechtenstein, 1968. (以下では単に『文芸通信』とする)
- (2) J. Rives Childs; *Restif de la Bretonne, Témoignages et Jugements. Bibliographie.* 1949, Paris, La Librairie Briffaut.
- (3) 「レ [チフ] は世間の者を涙でびしょびしょにする。この男の枕元には搾り器が必要だ。うまくすればその搾り器が自分ひとりだけでこの男のひどい産物に悲鳴を上げてくれるだろう。文体は低劣かつ下品、吐き気を催す事件の材料はいつも不品行極まりない輩のところから採ってくる。要するに、冗長さのほかに何のとりえもないのである……胡椒の商人だけが感謝してくれるだろう」
 「(…)言いたいことを何でも言える場合には、へたくそに言う権利などない。もしレ [チフ] のように皆が知っていることしか書かないのなら、たとえ月に四巻を出そうとも、わざわざペンを執るには及ばないのだ。誰もむりやりにその仕事をさせているわけではないのである(…)」Marquis de Sade; *Idées sur les romans*, (*Œuvres Complètes*, Paris, Au Cercle du Livre précieux, 1964, tome X, pp. 14 et 17. 後に見るように、このサド侯爵の発言は基本的に『文芸通信』、とりわけグリム男爵の見解と同質のものであることは注意されねばならない。
- (4) 「(…) これらの物語 [『当世女』のこと] の文体にはなんら見るべきものがない、とおっしゃる向きがあるかもしれない。さてその議論はどうであろうか。確かに彼の文体はドラのように華やかでもなければ、ヴォルテールのように軽快でも快活でもなく、ルソーのように感動的でもなければ、ラファイエットのように繊細でもない。クレヴィヨンのようにピリッとした味わいもなければ、リコボニ夫人のそのように簡潔でもない。(……)」*Journal de Neufchâtel*, octobre 1781, ライプズ・チャイルズ, 前掲書, 27頁。(ただし, 執筆者は Sébastien Mercier ではなく Henri-David Chaillet である。ピエール・テスチュ, 『レチフ・ド・ラ・ブルトンヌと文学創造』, Pierre Testud, *Rétif de la Bretonne et la création littéraire*, 600頁, 注254参照)
- (5) 「ハイネ氏はわが国では7月革命前には知られていなかった。今日では完全にわがに根づいている。氏はあの才気煥発なグリムがかつてそうであったと同じほどわれわれの仲間なのである」*Sainte-Beuve*, *Premiers Lundis*, (*Œuvres*, tome I, Bibliothèque de la Pléiade, 1956, p. 550.
- (6) 『文芸通信』の編者注(第10巻208頁~209頁, 注1)によれば, 1773年3月以降1789年の革命まで, グリムは主としてロシア帝国および北方諸国の委任を受けた外交官としての職務に忙しく, 「従って, 『文芸通信』における彼の実際上の(中略)役割はここ(1773年3月——引用者)で終わり, 以後はわずかに時折, メステールの毎月の通信に数行を付け足すだけになる。」
- (7) 『文芸通信』第10巻, 241頁。
- (8) 『文芸通信』第10巻, 209頁, および第11巻, 3頁。
- (9) 作品のフランス語タイトルは誤解のないかぎり簡略にし, 邦語訳は通例に従った場合が多い。
- (10) 正しくは, *La Dernière Aventure d'un homme de quarante-cinq ans*, 別名『サラ』である。
- (11) 出版年に関する1つの疑念。*Les Gymographes*は1777年の出版年を持っている。ライプズ・チャイルズ(前掲書, 245頁)もジルベール・ルージェ(『父の生涯』年譜,

La Vie de mon père; Chronologie, Editions Garniers Frères, Paris, 1970, p. XLⅢ) もこれを踏襲しているが、前年11月の『文芸通信』ですでに論評されているのはどういうことなのか。書籍に刷られる出版年というものが、特にレチフの場合、かなり便宜的なものであったことを示している(ライヴズ・チャイルズ前掲書, 207頁参照)。

2

- (1) 【ムッシュー・ニコラ】『第七期』 *Monsieur Nicolas ou le cœur humain dévoilé*, Librairie des Tuileries, chez Jean - Jacques Pauvert, 6 volumes, 1959. (以下ではこれを「ポヴェール版【ムッシュー・ニコラ】」と略記する) 第3巻529頁～538頁。ただし、この間の事情に関する「虚実」の詳細については、P. Testudの前掲書、第1章の後半、とりわけ58頁以降参照。【我が作品】 *Mes Ouvrages*, 同第6巻467頁～470頁参照。
- (2) 【文芸通信】第8巻, 16頁～19頁。
- (3) 同
- (4) 同
- (5) アンリ・クーレ『大革命までの小説』, Henri Coulet, *Le Roman jusqu'à la Révolution*, Armand Colin, 1967. Pierre Testudの包括的な研究の後では、レチフに関するクーレの所論のかかなりの部分が古めかしい既成概念に基づいている観を呈するものも致し方ないところだろう。
- (6) 同書, 第6章, 7章, 8章参照。および, J. ファーブル, 『小説論——ラファイエット夫人からサド侯爵まで』 J. Fabre, *Idées sur le roman*, Klincksieck, 1979, pp. 195-216.
- (7) *La Famille vertueuse*, 1767. Œuvres Complètes de Restif de la Bretonne, tomes 41 et 42. Slatkine Reprints, 1987.
- (8) A. タバラン, 『レチフの真実の顔』, A. Tabarant, *Le vrai visage de Rétif de la Bretonne*, Editions Montaigne, 1936, p. 141.
- (9) 【我が作品】, ポヴェール版【ムッシュー・ニコラ】, 第6巻, 565頁～582頁。
- (10) 同, 565頁
- (11) 同, 569頁～570頁
- (12) ライヴル・チャイルズ, 前掲書, 165頁参照。
Ferdinand Brunot, *Histoire de la langue française*, tome VI, pp. 950, 1145, 1183. Nouvelle édition, 1966, Librairie Armand Colin. この巻の筆者 A. François はレチフ流の改革をその他の案とともにユートピア的と評している。
- (13) 【我が作品】, ポヴェール版【ムッシュー・ニコラ】, 第6巻, 570頁。
- (14) 同
- (15) メステールの『略伝』参照(『文芸通信』, 第1巻, 3頁～13頁)
- (16) 【文芸通信】第9巻, 20頁から21頁。
- (17) 因に,
第3作【女性改革論者】 *Les Gynographes ou la Femme réformée*
第4作【男性改革論者】 *L'Anthropographe, ou l'Homme réformé*
第5作【法律改革論者】 *Le Thesmographe ou les Lois réformées*
- (18) ライヴズ・チャイルズ, 前掲書, 16頁参照。
- (19) レチフ特有の自負心はこう語っている。
「私は職工服を着て密かに何度も、買う人々が何と言うか聞きに行った。私のことを気遣いだと言う人もいたし、懲らしめるべき不埒者と言う人もいた。中には、光栄にも私を自由思想の熱心な普及者と見てくれた人もいたりした。有益な案がこれほどの悪評で迎えられたことはかつてない。正当に評価してくれた正常な頭の持ち主は首

部では辛うじて三、四人ただけである。地方では事情が違った。ほとんどすべての人が私の案の有益さを感じ取ったのである。いくつも出た海賊版のほうが、私が初版で得たよりもはるかに儲けた。(…)材料集めにあれほど金がかかった作品から私は一銭も得なかったのである」『我が作品』「ボヴェール版『ムッシュー・ニコラ』」477頁。

(20) 因に、この3篇に対する論評を以下に訳出しておく。

《『T侯爵、あるいは若者学校。T商館の実業家 M. E. - A. デフォレ収集の讀書き中より』12折版全4部。巻頭に掲げた青少年に対する意見の中で、著者は順に青年男女、若い市民男女に呼びかけ、結婚の必要性和利点を説いて聞かせています。これがこの小説の狙いなのです。なにしろ今日は、爪の先まで、はたまたこんな反故のような作品においてもモラリストである時代なのです。》『文芸通信』第9巻、274頁。

《『父への手紙』というものが、名前の思い出せない風変わりな男によって出版されました。たしかしばらく前に、『完春改革論者』だとか『演劇改革論者』だとかをまったく異常な文体で書いた男です。この五巻の新作も前作を裏切っていません。例によって、この手紙は本物だと称しています。》『文芸通信』、第10巻67頁。

《『女三態、娘、妻、そして母』道德的実話滑稽譚。十二折版全三部。三態だから三部。読めた代物ではありません。》『文芸通信』第10巻、207頁

3

- (1) ライヴズ・チャイルズ、前掲書、227頁
- (2) 『文芸通信』第11巻、160頁～161頁。
- (3) *Le Paysan perversi*, 1776, (Euvres Complètes de Restif de la Bretonne, tomes 95 et 96. Slatkine Reprints, 1987. この作品の書誌学的側面については、ライヴズ・チャイルズの前掲書にきわめて詳しい考証が載っている (ライヴズ・チャイルズ、前掲書、226頁～240頁)
- (4) 『文芸通信』第11巻、160頁～161頁。
- (5) 同
- (6) 同
- (7) 同
- (8) 同。

この号の別の文脈で、どんなものにも何かしら光るものを見付けるように努めねばならないという主旨のディドロの発言が紹介されている (pp. 165-166)。まさにそれを実行した思いであったに相違ない。

- (9) 『文芸通信』第11巻20～23頁参照

4

- (1) 『文芸通信』第11巻、226頁～227頁。
- (2) *L'École des pères*, 1776, フランス国立図書館所蔵本のマイクロフィルムによる。
- (3) Maurice Blanchot, Préface pour: Restif de la Bretonne, *Sara ou la dernière aventure d'un homme de quarante-cinq ans*, Éditions Stock, 1949, p. xx.
- (4) このヴァレリーの評言は都合の良い所しか引用されることが多いので全文を訳出しておく。(『南仏流謫中の私の唯一の策は、頭脳的であるよりも官能的な小説を読むことでした。フォブラ (この作家は知りませんでした)、レチフ、それにピゴー・ルブランなどもです。これらの素晴らしい作家たちはディドロからペイルへ至る道筋に並んでいます。私はレチフをルソーよりはるかに高く買います。『新エロイーズ』を開きました。痛切です。そしてちょうど残り香が香って、それが心を悲しませる引き出しを閉めるようにして本を閉じました。レチフは村のカザノヴァです。こうして私

は「操行賞」の準備をしているわけです……（これは冗談ではありません）ライヴズ・チャイルズ、前掲書、171頁。（最後の一句はアカデミーフランセーズで行う予定の演説の準備を匂わせたものと言う）

- (5) この記事の6年後の1782年、『文芸通信』四月号の始めてメステールはこう書いている。「人はレチフ・ド・ラ・ブルトヌ氏のことを《溝川のルソー》と言った。ラクロ氏はさしずめ上流社会のレチフだと言いたい誘惑に駆られはしないでしょうか」『文芸通信』第13巻、107頁。
- (6) 『文芸通信』第11巻、226頁～227頁。
- (7) 同。
- (8) このふたつの論評を以下に訳出しておく。
- 《『女性改革論者』あるいは（略）。これは気違いじみているかと思えば厳しげな夢想の雑然たる山なのですが、相変わらず退屈な代物です。この著者が『墮落百姓』で得た一種の名声がなかったならば、ここでわざわざ言及するまでもなかったかも知れません。この新作の類笑ましい思想のひとつは、女性の行いの最終審判をするために、既婚夫人たちによる非公式会議を設立するということです。ラ・ブルトヌ氏が執着しているかに見えるもうひとつの規則案は、娘たちはすべてポロネーズを着用し、既婚女性はローブを着用するというものです。これだけ申し上げれば後は推して知ることができます。》『文芸通信』第11巻、388頁。
- 《『新アベラール』、あるいは一度も会ったことのない二人の恋人の手紙（略）『墮落百姓』その他もろもろの著者、レチフ・ド・ラ・ブルトヌ氏著。この小説はレチフ氏のすべての小説と同様、非常識と悪趣味のかたまりであります。天才ぶりと創意と興味深さにも溢れています。作品を損んでいる長たらしさ、馬鹿馬鹿しさ、凡俗さの一切を剥ぎ取れば素晴らしい作品とすることも難しくはありません。作品の目的はきわめて称賛すべきものであり、力強く、驚くべき真実さをもって描かれた数々の場面ともども、そこには崇高な道徳の基調が見られます。この小説は夫婦愛の實際理論と呼ぶうるかも知れません。これは、人物の身分も性格も状況もまったく異なった、しかしすべて幸福に暮らしている六組の結婚の手本を描いたものであります。こう述べますと、恐らくかなり新奇で空想的な代物と思われるかもしれませんが、著者は、どのような教育を施せば、このかくも稀で貴重な家庭の幸福に対して若者を準備させることができるか、その永続を保証する箴言とは何かを示すことによって、作品をなかなか真実味のあるものとしています。》『文芸通信』第12巻、150頁～151頁。
- (9) 論評の末尾、ツィンツェンドルフ伯爵のモラヴィア兄弟団（ヘルンフーター）とレチフの親近性を指摘した箇所は、ライヴズ・チャイルズの前掲研究書ではなぜか省略されている。このフス派の流れを汲み、敬虔主義に基づいた原始共産の共同体とレチフの関係は、マーク・ポスター、『レチフ・ド・ラ・ブルトヌのユートピア思想』、Mark Poster, *The Utopian Thought of Restif de la Bretonne*, New York University Press, 1971, pp. 68-69でも、またアンドレ・リシュタンベルジェの古典的な『十八世紀の社会主義』André Lichetenberger, *Le Socialisme au XVIII^e siècle*（野澤協訳、法政大学出版局、1981年）、178頁から190頁でも論及されている。しかし私見では、このようないわば「まともな」思想史的研究によってはレチフの実像は遂に掴まらないまだらうと思われる。
- (10) 今のところ思い付きの域を出ないが、「父」という観念が宗教・政治・社会を、いわば天界から地上まで刺し貫いている文化において、レチフが数百人という架空の娘たちの「パテルニテ」を主張していたこと、言わば自らを大文字の「父」たらしめんとしたことを、『父の生涯』のうんざりするような父権賛美の物語と併せ考えるとき、そこにはひょっとして偽装された「父殺しの願望」が潜在してはいないだろうか。
- (11) 『文芸通信』第12巻、174頁～175頁。

(12) 【文芸通信】第12巻, 285頁。

5

(1) 【文芸通信】第12巻, 498頁。

(2) 【我が作品】、ポヴェール版【ムッシュー・ニコラ】、586頁～587頁。

(3) 同

(4) メトラ、【政治文学秘密通信】。ライヴズ・チャイルズ、前掲書、27頁～28頁。

(5) 【文芸通信】第14巻, 205頁。

[参考書目]

- * *Dictionnaire Universel du XIX^e siècle*, Larousse
- * *Revue Dix-huitième siècle, n° 1*, Éditions Garniers Frères, 1969
- * *L'Idée du bonheur au XVIII^e siècle*, Robert Mauzi, Armand Colin, 1969
- * *La Destinée féminine dans le roman européen du dix-huitième siècle*, Pierre Fauchery, Armand Colin, 1972
- * *Le roman épistolaire*, Laurent Versini, P.U.F., 1979
- * *Cahiers Renauld Barrault 90, numéro spécial, Restif de la Bretonne*, Gallimard, 1975.
- * 【フランス百科全書派の研究】、桑原武夫編、岩波書店、1954年
- * 【ディドロ】(人類の知的遺産41); 中川久定著、講談社、昭和60年
- * 「思想」1984年10月号、特集「ディドロ——近代のディレンマ 没後200年」
- * 今日においては殆ど積極的な意義をもたないレチフの研究の古典的文献や、独立した著作ではない評論の類は省略する。

(了)

(1988年5月)